全国小・中学校作文コンクール埼玉県審査　特選3作品（下）

命のつながりを胸に

中学校の部　稲村柚里香さん（開智中1年）

掃除当番で、校庭の周りを清掃していたときだった。

「あっ、とかげがいる。」

「えっ、どこ。」

視線の先をたどると、ひなたぼっこをしているカナヘビがいた。

「それ、カナヘビっていうんだよ。」

「へー、カナヘビっていうんだ。」

私とその子は校庭にそっとカナヘビを置き、逃がしてやった。

元気で、長生きしてね。

心からそう祈った。そして私は、あの秋晴れの日のことを思い出した。

春先、冬眠から覚めたカナヘビたちは、体を温めるために太陽の光を浴びようと草むらから出てくる。岩の上でひなたぼっこしているときは、まだ体温が上がっていないため捕まえやすい。小学生のころは、よく庭でカナヘビを捕まえて観察したものだった。

ある年の七月の初め、おなかの大きなカナヘビを捕獲した。カナヘビは、尻尾の付け根の太さで、オスとメスを見分ける。このカナヘビは尻尾の付け根が細かったので、メスだろう。それにしても、こんなにおなかが膨らんでいる個体は見たことがない。もしかしておなかに卵があるのかもしれない。

いつもは数日間飼育ケースに入れて眺めるだけだったが、このカナヘビを飼ってみたいという衝動がわいてきた。

名前はもう決めていた。「かな子ちゃん。」

私はペットショップに行き、店員さんにカナヘビの飼育方法を教わった。

まずは、環境づくり。飼育ケースの底に爬虫類のマットを敷き、水入れをセットする。このマットは乾燥しないように、霧吹きを欠かしてはいけない。さらに、カナヘビが安心できるように、身を隠せる枝葉を置く。これは、落葉樹だとすぐにしなびてしまうことがわかったので、庭のコニファーにした。かな子ちゃんがリラックスできたかどうかはわからないけれど、飼育ケースの掃除をするときは、針葉樹のさわやかな香りは心地よく感じられた。

一番の問題はエサである。カナヘビは動くものしか餌だと認識しないため、生餌が必要となる。カナヘビが美食家であることは、数日間カナヘビを飼ったことがあるから知っていた。庭でクモやバッタを捕まえてきて与えても、見た目がやわらかそうで、程よいサイズの昆虫でないと食べようとしないのだ。

ペットショップでは、爬虫類ペット用の餌として、L、M、Sサイズのセイヨウコオロギを売っていた。かな子ちゃんの口に合うサイズのコオロギはMサイズ。これを定期的に買ってきて、毎日与える。かな子ちゃんの餌の見通しは立ったが、この先、卵がふ化してカナヘビの赤ちゃんが生まれた場合、赤ちゃんカナヘビの口にはSサイズのコオロギでも入らないという。そこで、既に羽の生えたLサイズの成虫コオロギを繁殖させ、コオロギの赤ちゃんを生産することを勧められた。

コオロギを繁殖させる飼育ケースには、湿らせた昆虫用のマットを敷き、隠れ家と水分の蒸発防止のため、細かくちぎった新聞紙をまいておく。餌は、コオロギは共食いすることがあるので、動物性と植物性のバランスを考え、スズムシの餌と野菜くずを与える。一番忘れてはならないことは、セイヨウコオロギは日本の固有種でないことである。一匹でも逃がしてニホンコオロギとの交雑種が生まれてしまったら、生態系に悪影響をおよぼしかねない。だから、最後の一匹の寿命が尽きるまで責任を持って飼う覚悟を決めた。

当時、うちの玄関のたたきにはすでに、クワガタ、スズムシ、クロアゲハ、ナミアゲハの幼虫の飼育ケースが並んでいた。登校前は、それぞれの観察に忙しかった。

私にとって夏は、心躍る季節だった。

虫の飼育のみならず、アブラコウモリが部屋に迷いこんできて、網をふり回したこともあった。網の底で、浅い息を吐いていた毛糸玉のような生き物。そっとのぞき込むと、ガムがへばりついたような鼻と小さな黒い瞳が見えた。コウモリは確かに、哺乳類の顔をしていた。

今度は迷子にならないでね。

夜空に向かって網をふると、ハタハタと飛んで、やがて、夜の闇に消えていった。アゲハチョウの幼虫は、終齢幼虫ともなると食草を猛烈に食べるし、ふんでケースも汚れる。だから、私の下校を待たずに母がユズやサンショウの葉を与えて、ケースを掃除してくれていたこともある。家族が協力してくれたおかげで、私は何度も美しいチョウの羽化を目撃できたし、空に飛び立たせるときの浮き立つような感動も味わえた。中学生になった今ふり返ると、なんて濃密なひとときだったんだろうと思う。

カナヘビの卵をふ化させるのは、初めての経験である。おなかがはち切れそうなかな子ちゃんを見ながら、なんとか無事に生まれてほしいと願う日々。

「かな子ちゃん、体力つけなきゃだめだよ。」

飼い始めて数日は、私を警戒しているのか、かな子ちゃんは与えた餌のコオロギを食べようとしなかった。

しかし、毎日語りかけているうちに、私の目の前でもコオロギに食いつき始めた。それどころか、私がケースのふたを開けるのを待ちかねていたかのように、すぐにコニファーの茂みから顔を出し、ほとんど私の手からコオロギを食べるようになった。

コオロギの飼育の方も順調だったが、唯一困ったのはセイヨウコオロギの鳴き声だ。軒下から聞こえる「リリリ…。」というニホンコオロギの音色とは似ても似つかない、大音量で鳴くのである。スズムシもよく響く声で鳴くが、セイヨウコオロギときたら体にマイクを付けているとしか思えない。近所迷惑になるのでケースを外に出すわけにもいかず、夜はなかなか寝つけなかった。ある日、マットの隙間に細長い半透明の卵がびっしり産みつけられているのを発見したときは、我慢したかいがあったと喜びがこみ上げてきた。

かな子ちゃんを飼い始めてから二週間後、ケースに霧吹きをかけようとコニファーの枝をどかしたとき、白いものが目に飛び込んできた。カナヘビの卵だ。卵は四つ。やや細長い形で、表面にかすかにうずらの卵のような模様がある。上下を逆さまにしてはいけないと聞いたので、表面に黒のマジックペンで軽く点をしないし、ふ化した赤ちゃんカナヘビを親がうっかり食べてしまうこともあるらしい。

そこで、用意したのはふたつきのプリンカップ。底に湿らせた昆虫マットを敷き、卵を置くためのくぼみをつける。そのくぼみの上に、黒ペンでつけた印を上にして、卵をのせる。卵を指でつかむときは、緊張で指先がふるえそうになり困った。四つの卵を全部カップに回収したときには、こめかみが汗でびっしょりぬれていた。ふたを閉め、これから約一か月、湿度管理しながらふ化を待つ。

一方、セイヨウコオロギの親たちは、日に日に羽がすりきれてきた。やかましく鳴き交わしていた音量も下がり、ときどき思い出したようにわびれ声で鳴くのが痛々しかった。そのうちに、日ごとにコオロギの死体を発見するようになってきた。蚊なんかは平気で叩きつぶすのに、毎日世話をしてきたコオロギを捨てるのは忍びなくて、庭の土を掘ってなきがらを埋めた。

カナヘビの卵は水分を吸って成長する。かな子ちゃんの卵も、最初に見たときは細長かったが、ニワトリの卵のような形にふっくらしてきた。しかし、四つの卵のうち、一つだけどうしても大きくならない卵があった。よく見ると、表面にうっすら白いカビが生えていた。無精卵は成長しない。このままにしておくと、他の卵にもカビがうつりかねないので、取り出してこれも庭に埋めた。

ある日、コオロギの飼育ケースの新聞紙の上に、黒ゴマのようなものがたくさん見えた。大きさは、新聞の文字一つくらい。ぴょんぴょん元気に跳ねている。コオロギの赤ちゃんが誕生したのだ。霧吹きで水を吹きかけると、その勢いで死んでしまうほど弱々しい。何を食べているのか、あまりに小さすぎて、スズムシの餌が減ったかどうかの判別もつかない。それでも、毎日いくらでも生まれてくる。準備万端。あとは、カナヘビの赤ちゃんの誕生を待つばかりだ。

かな子ちゃんが産卵して一か月以上経った。ある朝突然、卵のひとつに亀裂が入っているのに気がついた。卵がぐにゃりとつぶれ、中から水があふれ出ている。ニワトリの卵のようにパカンと二つに割れると思い込んでいたので、私は泣きそうになって母を呼んだ。

「なんで？　卵、つぶれちゃったの？　死んじゃったの？」

「よく見て。鼻が出てるでしょ。これから生まれるのよ。」

たしかに亀裂から何かが出ている。

「でも、鼻先がぬれていると、息ができないんだって。」

と母に言われ、私はティッシュでこよりをつくり、そっと赤ちゃんの鼻先にこよりを当てた。水分が取れたかどうかはわからない。でも、しないよりはまし。中腰になって身を乗り出し、息を殺して観察を続ける、赤ちゃんカナヘビは一体いつ出てくるんだろう。

二十分後。突然するっと何かが出てきた。動きが速すぎてよく見えない。それはあっという間にプリンカップのふちをよじのぼり、カップから降りてテーブルを歩きだした。

もう、こんなに動き回れるんだ。

あわてて捕まえ、赤ちゃん用のケースに移した。餌の取り合いで成長に差が出ないように、それぞれに飼育ケースを用意してある。溺れてはいけないので、水入れはペットボトルのキャップ。そのキャップでさえプールに見えるくらい、赤ちゃんは小さかった。

ちっちゃな手足にかわいい目。小さいのに、なんて存在感があるんだろう。生まれたての生き物が、こんな生き生きしてるなんて。

それから、一時間以内に、他の子も次々と生まれてきた。元気な赤ちゃんが合計三匹生まれた。

翌日、初めての餌をあげることにした。赤ちゃんコオロギは小さすぎて、子どもの私の手でさえ持ち方を失敗するとつぶれてしまう。まずは様子見に、一匹だけケースに入れた。初めて動くものに出会い、本能が目覚めたのだろうか。赤ちゃんカナヘビが赤ちゃんコオロギに興味を示した。どんどん近寄ってくる。

そして、ぱくり。食いついた。

こんなに小さくても本能があるんだ。

しびれるような感動を覚える一方で、胸が痛くてたまらなかった。

この痛みは何だろう。

どうして私、泣きたいような気持ちなんだろう。

これは悲しみだ。胸をえぐられるような、ひりつくような悲しみ。毎日水と餌をやり、大切に育ててきた赤ちゃんコオロギを、赤ちゃんカナヘビの餌にするということ。今の今まで、こんな気持ちになるとは予想もしていなかった。

カナヘビの赤ちゃんが赤ちゃんコオロギを呑み込むその瞬間まで。かな子ちゃんには平気で、買ってきたMサイズのコオロギを与えていたのに。

唐突に私は悟った。私は全く想像力が足りなかった。生き物が生きるということを。私たち生き物は、生きるために食べ続けるということは、動物であれ植物であれ、何かの命を奪い続けるということだ。それが、生物が生きるということなのだ。

九月のある朝、登校前にケースの隅に異変を感じた。あわててふたを開けると、一匹の赤ちゃんカナヘビがおなかを上に向けて死んでいた。いやな予感はしていた。ここ数日食欲がなさそうで、昨日もコオロギを食べ残していた。私は母に抱きついてわんわん泣いた。

こんなに小さいまま死なせてしまった。たった一か月の命だった。毎日胸を痛めながら赤ちゃんコオロギを与えて、一生懸命育てたのに。こんな思いをするくらいなら、カナヘビの卵をかえそうなんて思わなければよかった。そもそも、庭でかな子ちゃんを捕まえて飼おうなんて考えなければよかった。私はごう慢だったのかもしれない。自然に手を出してはいけなかったのかもしれない。

カナヘビは冬眠する。日ごとに気温が下がり、餌として育てていた赤ちゃんコオロギの数も減ってきた。どうしよう、カナヘビ親子を庭に放すときが来た。

十月の秋晴れの日、かな子ちゃんと二匹の子どものカナヘビを庭に放した。

元気で、長生きしてね。

三匹は親子と知ってか知らずか、同じ方向へと去って行った。

数日後、二匹の赤ちゃんカナヘビが軒下で寄り添っているのを見た。庭で見ると、あまりに小さくはかなげだったが、二匹一緒にいることが私にかすかな希望を抱かせた。

かな子ちゃんによく似た方カナヘビが、ウッドデッキの上で休んでいた日もあった。いつものように「かな子ちゃん」と名前を呼んで、草むらで捕まえたオンブバッタの子どもを手渡して与えてみた。野生のカナヘビなら、人が近づけば逃げる。けれども、そのかな子ちゃんらしきカナヘビは、私の手から二匹も昆虫を食べた。食べた後も、「もっ

と欲しい」と言うように小首をかしげ、つぶらな目で私を見上げた。

爬虫類が人になつくかどうかわからないし、そのカナヘビがかな子ちゃんだった証明もできない。でも、庭で生き物と触れ合うことができて嬉しかった。庭で動物とたわむれていると、自分も彼らと同じ地球に住む一員であることを改めて確認できる。

あの年以来、私は、昆虫や動物の飼育を止めた。庭のフェンネルでキアゲハの幼虫が育っているのを見ると、鳥に食べられないかと心配になるが、手出しはしない。私が育てた四個のカナヘビの卵のうち、育ったのは二匹だけ。自然界には、餌不足や天敵の存在など、生態系のバランスを保つ仕組みが働いているから、庭に旅立ったカナヘビの子どもが二匹とも生きのびられたかどうかはわからない。命の行方を考えると、胸がしめつけられるけれど、これを自然の摂理というのだろう。もっとも、当時はそんな言葉を知らなかったので、今改めて思い出をなぞり、追体験して考える。

カナヘビ飼育によって、私は、命のつながりと自然の摂理を学んだ。生き物が生きるために、他の生き物の命を奪い続けていること。人がいくら手をかけても、自然界のバランスという掟には逆らえないということ。生きるということは、なんと切実で、せつなくて、美しいのだろう。生き物の一刹那が、絶妙な命のバランスの上に成り立っているからこそ、羽化して飛び立つチョウは、失われた他の命の分まで美しく輝くのではないだろうか。

春先のぽかぽか陽気の日を、私は「カナヘビ日和」と名づけている。こんな日はきっと、冬眠から覚めたカナヘビがあちこちから出てきて、のんびりひなたぼっこをする。そして、カナヘビたちは昆虫の命をいただいて繁殖し、卵を産み、そのうちのいくつかの命は自然消滅し、そして冬を越せた命だけがまた翌年に現れる。

あの年、目の前で消えていったたくさんのコオロギやカナヘビは、命のつながりを私に教えてくれた。私は決して、命のつながりを見つめる目を失いたくない。毎日の食卓では、目の前の食べ物の命に感謝したい。自分が他の命の上に成り立つ、生かされた存在であることを忘れたくない。そして、真面目に、誠実に、ひたむきに生きていきたい。

なぜなら、私の手の中から失われていったおびただしい数の命たちが、今も私にささやきかけるから。

小さな命の重みを忘れないで、一生懸命に生きて、と。